

プロローグ

平成十三年暮、正岡明氏（子規末裔）より一枚の葉書が届いた。

「ちょっとした情報ですが、実は今夕、松山子規記念博物館の森氏（学芸員）より電話があり、根岸子規庵保存会がこちらへ来るので会ってくれないかとのこと。たぶん今回の本の件（拙著『隣の墓―子規没後の根岸・子規庵変遷史―』）ではないかと直感したものの真意は不明。それもなぜ松山を通じて打診して来たのか、用件は何なのかに関しても返答なし。……兄貴（浩氏）は会うらしいが」（要旨抜粋）と記されていた。

正岡家と保存会は半世紀にわたり交流が跡絶えている。唐突な保存会の動き、用件を告げない子規博の介在に私も首を傾げた。

ところが三日後、今度は浩氏の方から驚愕の報せが届いた。

「一昨日、保存会の方、二人来られ、行方知れずになっていた○○○○（葉書故、伏字にしたとある）が子規庵土蔵の中から出て来た。この事他言無用」と言われた。伏字はまっぴら様直ぐにお気付きと思う。ただ蔵の中から今頃出た話はいくら考えても釈然としない。昔の